
時浮橋 ときのうきはし

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時浮橋 ときのうきはし

【Zコード】

Z5789K

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

『犬夜叉』二次創作短編集。犬夜叉一行 + 殺生丸一行中心。本編終了後のエピソード多し。基本はラブコメ、糖度高め。戦いの終わった平穏と、ハッピーエンドの向こう側。【不定期更新】

しりい未来に繰るのは（前書き）

かごめと犬夜叉。最終回に寄せて。

犬夜叉×かごめ風味。

しあい未来に繰るのは

クラス、出席番号、氏名を書きこむ。そこまで滑らかに動いていたシャープペンシルの先が、ぴたりと止まつた。

かごめはじつと白い紙面を見つめると、小さくため息をついた。

薄い紙に記されているのは、『進路希望調査票』の文字。

ペン先を空白欄に乗せたまま、かごめは机に頬杖をついた。

「進路……進路か」

「ツコツとペン先で叩くと、紙に鉛筆の痕がうつすら残る。しあなそは文字を形作るには至らず、かごめはもう一度ため息をこぼすと消しゴムをかけた。

高校生活も三年目を迎える、いよいよ本腰を入れて卒業後の進路について考えなければならない。進学か就職か。いずれにせよ、将来に対してなんらかの答えを出すには違いなかつた。

中学校からの友人たち皆、大学へ進むと言つていた。それなりに成績優秀なかごめも同じだらうと彼女たちは考えている。

しかしシャープペンシルを握るかごめの手は、それにふさわしい答えを書こうとしなかつた。いや、何も書けずにいた。

「……思い浮かばない」

降参とばかりにシャープペンシルを転がしたかごめは、机に頬を寄せた。横たわった視線は、調査票の隅にプリントされた提出期限明日の日付に引っかかつた。

「どうしよう……

何度も同じ呟きをくり返しただらうか。呟きが積もるばかりで、現状は何も変わらなかつた。

高校を卒業した、その先。かごめの目にはなんのビジョンも映らない。大学生の自分や社会人として働く自分を想像してみても、まるで他人事のように実感が湧かなかつた。

その代わりに浮かぶのは、今ではもう懐かしいと思つようになつ

てしまつた姿。

「犬夜叉……」

彼の名前を口にしただけで、胸の奥が苦しいほど痛む。かごめはぎゅっと目を瞑つた。

四魂の玉が完全に消滅したことにより、遙かな戦国時代と現代を結んでいた骨食いの井戸は塞がつてしまつた。隔たれた時空はつながらぬまま一年が経つ。

まともに言葉を交わす間もなかつた。一瞬絡んだ視線はすぐに断たれて、とつさに伸ばした手は何も掴めなかつた。

あんまりだ、と思つ。

すれ違ひ続けた想いが通じて、長い永い因縁と戦いに決着をつけ
て それで終わりだなんて。

過酷な運命を強いておきながら、用済みになつた途端目の前で引き裂くなんて。本当に、あんまりだ。

使命を果たしても、あの奇妙でかけがえのない日常が続していくのだと、当たり前のように考えていた。

家族とともに暮らしながら、井戸をくぐれば犬夜叉や仲間たちの許へ行ける。大切なものを何ひとつ失わない幸福を夢見た。

だが、それは許されぬがままだつたのだろうか。

選ぶのはただひとつ。現代か戦国時代か。家族か 命を賭して恋した少年か。

闇から抜け出して家族の姿を目にした瞬間、隣の犬夜叉を忘れて母の胸に飛びこんだ。あのとき、自分の心は確かに家族の許にあつた。

だから時空の扉は閉ざされてしまつたのか？

「……わかんないよ」

どちらか一方なんて選べない。

目を開けたかごめは顔を上げると、白紙の調査票を見下ろした。シャープペンシルを手に取り、そして。

たたも「と広げたスカートのポケットから、ひらりと何かが落ちた。

「ん？」

巫女装束の膝元から拾い上げたそれに、かごめは目を瞬かせた。

「これ……持つてきちゃつたんだ」

戦国時代にはそぐわない、未来の印刷技術を施された白い用紙は、さんざんため息をつかされた進路希望調査票だつた。いつたん提出したもの、もう一度書き直すように言われて返されたのだ。いつまでも出せずにいたまま紛失してしまい、今頃こんなところから見つかるなんて。

空白欄に記入された『未定』のふた文字に、かごめは小さく笑つた。

「おい、かごめ。いつまで支度してんのだよ？」

戸の向こうから苛立つた口調の声がかかる。着替えのために外で待たせている人物を思い出し、かごめは返事をした。

「あー、ごめん。もういいわよ」

「つたぐ、これだから女は……」

ぶちぶち文句を垂らしながら部屋に入ってきた犬夜叉は、かごめの手にある紙切れに金色の瞳を眇めた。

「なんだそれ」

「スカートのポケットに入つてたのよ。進路希望調査票」

「しんろきぼーちょーさひょー？」

「ほら、前に高校つて説明したでしょ。そこを卒業したあと、どうしたいか調べる紙

「ふうん……」

隣に腰を下ろした犬夜叉は、難しそうな顔で調査票を睨んだ。

「『未定』つて書いてあるぞ」

「そのときは決まってなかつたからね。」

「そうだー、犬夜叉、何

か書くものある?」

「そこいらへんに楓ババアの道具があるんじゃねえか」
部屋の隅から筆を取つてくると、毛先に墨を含ませる。口み上げ
てくる笑みを抑えながら、かごめは『未定』の横に新しい文字を書
き足した。

「でーきたつ」

「……なんて書いたんだ?」

かごめの手元を覗きこんだ犬夜叉は、眉間に皺を寄せた。

「えい……『永久就職』ってどういう意味だ?」

「んー、内緒」

「おい」

「いつか教えてあげるわよ」

だれよりもそばにいたいと望んだ恋人に微笑み返し、かごめは小さく折りたたんだ紙を懐に忍ばせた。そこから幸せなぬくもりが沁みこんでくるようで、彼女はそっと手を伏せた。

いつかこの言葉が本當になる日まで秘密にしていよ。自分たちのことだから、そこへたどり着くまでに寄り道をしそうだけれど、それすらも楽しみだ。意味を知った犬夜叉は、どんな顔をするのだろうか。

思いを馳せるふたりの未来は、どうまでも続いていく。

CALLING YOU (前書き)

りんと殺生丸。少女の選ぶ、生きるべき世界。
殺生丸×りん風味。

CALLING YOU

あの人に名前を呼ばれることが好きだった。

頭を撫でられたり、抱き上げられたり、ましてや田線を合わせることすら稀だった。あの人のまなざしはいつも遠くて、その心に自分の存在は確かに映つているのか不安だった。

だから、不意打ちのように呼ばれる名前が、本当に嬉しかった。そばにいてもいいのだと言つてもらえたような気がして。

名前を呼ばれる。そんな些細で当たり前の行為が、自分のすべてを許してくれていた。

「りん」

影とともに空から落ちてきた低い声に、りんは顔を上げた。

「殺生丸さま……」

白い尾をたなびかせ、殺生丸がふわりと目の前に降り立つた。あいかわらず重さを感じさせない身のこなしだ。

草地に座りこんだりんは、ぽかんと殺生丸を見上げた。静かとうよりも、凍りついた水面のような双眸が見下ろしてくる。

「何をしていた？」

温度を感じさせない声音は、いつもと同じことを訊いてきた。彼がいなかつた間に何か変わったことはないか。特になくても、りんが笑顔で身の回りに起きた出来事を話し出す。

しかし、今日のふたりを包んだのは沈黙だった。どこかぼんやりと見つめてくるばかりのりんに、殺生丸は微かに眉をひそめた。

りんはのろのろと視線をさまよわせた。草の上には、摘んだばかりの花が散らばっていた。

ああ、そうだ。

「……花を摘んでいました。珊瑚さんちの子どもたちに、持つてあげようと思って……」

それから?

りんはぱちりと瞬くと、散らばった花をひとつひとつ拾いはじめた。赤い花、黄色の花、白い花。幼い子どもたちが大好きな、鮮やかな野の花。

再び降りた沈黙のなか、殺生丸はじつと花を拾うりんを見つめていた。その視線を感じて、りんは俯いたまま口を開いた。

「花を摘んでいたら、村の男の子がやってきて……手伝ってくれて」楓のところによく薬を貰いにやってくる少年だった。病気がちな母親に代わって幼い弟妹たちの面倒を見ながら、父親の仕事の手伝いもこなす、村でも評判のいい若者だ。年の頃も近く、楓の許で暮らしはじめてすぐに打ち解けた。

お互に気ままな子ども時代は終わって、そろそろ一人前の仕事を任される年齢だった。りんは先日、はじめてひとりで赤子を取り上げた。彼も父親から、「もう嫁をもらつても大丈夫だな」と言われたのだという。

「……それで、抱きしめられたんです」

「おれの女房になつてくれないか?」

後ろから回された腕は、思いがけずたくましかった。首筋に落ちたささやきには、抑えることさえ苦しそうな熱がこもっていた。

りんは拾い集めた花を両手で抱えた。抱き寄せられた拍子に落としてしまったのだ。

「ずっと好きだったって言われました。お嫁さんを貰うなら、あたしがいって……」

まるで夢を見ている気分だった。心が羽のようになつて、今もまだふわふわと落ち着かない。

花束に顔を寄せたりんは、そつと息をついて目を伏せた。「びっくりしたけど、嬉しかったです。そんな風に言つてもらえて……でも」

花の陰で頬に熱がのぼっていく。睫毛の先に火が点りそうだった。
「嬉しかつたけど……だれかのお嫁さんになるなら、あたし 殺生丸さまがいって、思つたんです」

走り出した心臓と一緒に、どこかへ逃げてしまいしたかつた。殺生丸の瞳に映つてゐる事実がたまらなく恥ずかしい。

深呼吸すると、花の香りが肺を満たした。面映ゆい答えを考えついたあとのことを思い出し、りんの頭はすうつと冷めた。

「だけど、そう返事したら……急に怒り出して」

不意に突き飛ばされ、りんは尻餅をついた。驚いて振り返ると、少年は信じられないものでも見たような顔をしていた。

あれは妖怪だ、と彼は怒鳴つた。おまえのところに通つてきてるのだつて、いつかおまえを騙して食つちまつつもりなんだつて、みんな言つてる。

りんは言い返した。あの人は優しいよ。とても強い妖怪だけど、同じくらい優しいって知つてるよ。

「おかしいって言わされました。妖怪を好きだと考へるなんて、おかしいって」

少年は青ざめた顔で走り去つた。りんの言葉は届かなかつた。彼の背中を見送つて、こみ上げてきたのは、さびしさとも悲しみともつかない虚ろな思いだつた。

りんはゆつくりと顔を上げた。再会した金の瞳にはやはり波ひとつなく、ほつとしたようながっかりしたような気分になつて小さく笑つた。

「殺生丸さまはとつても優しいのに……好きになつたらおかしいなんて、そのほうがあかしいですよね」

殺生丸はわずかに目を細め、どこか疲れた様子でため息をついた。

「…………おまえは本当に変わつてゐる」

「え」

まさか殺生丸からも言われるとは思わず、りんは大きな目を更に丸くした。

殺生丸は、茫然とする少女を片腕で軽々と抱き上げた。華奢とはいえ、昔に比べてずいぶん成長したはずなのに。そのまま、悠然とした足取りで歩き出す。

久しぶりに近づいた端麗な横顔に見とれていると、「りん」と名前をささやかれた。

「はい」

「おまえは私をおそれない」

「どうして怖がる必要があるんですか?」

「……だから変わっているというのだ」

殺生丸の声には呆れが滲んでいたが、それは決してりんを傷つけるものではなかった。りんはおずおずと片手を伸ばし、殺生丸の首に抱きついた。

花の香りに、懐かしさすら覚える殺生丸のにおいが混じる。降り積もつたばかりの雪の白さに似た、清々しく涼やかな芳香。

名前ひとつでりんのすべてを許してくれるこの人を、どうして嫌うことができるだろう。

離れていても昔ほど不安にならないのは、離れているからこそ不器用な心が見えてくるからだ。疑うまでもなく、殺生丸はこうして会いにきてくれる。

「……りん」

長い爪を備えた指先が、ためらいがちに頬へ触れてくる。りんは殺生丸の首筋に頭を寄せたまま、その言葉を聞いた。

「私ともに来い」

来てくれるかと尋ねるのではなく、命令口調がとてもこの人らしいと思った。これが、りんの好きになつた人なのだ。今までも、これからも、いつまでも。

りんは微笑んだ。

「はい、殺生丸さま」

少女の腕から溢れんばかりの花束は、彼女の喜びそのもののようにだつた。

CALLING YOU おまけ・似た者兄弟? (前書き)

その頃の邪見と弟夫婦。

CALLING YOU おまけ・似た者兄弟?

「殺生丸様あ、どこへ行かれてしまったのですか？」
「あれ、邪見じやない。こんなところで何してゐるの？ 殺生丸は？」
「むむつ、かじめと犬夜叉ではないか」
「またどりせ置いてけぼり食らつたんだね」
「そうなの？」
「つるさこいつるさこ、貴様らには関係なかろつー。」
「図星なのね……」
「あいつだつたら、どりせりんとかいうガキのとこだわ」
「そのりんがいないから探しとるんだ！」
「えつ、りんちゃんいないの？」
「いつものように巫女の許へ向かつたといひ、花を摘みにでかけた
と言われたんじや」
「だつたら村のすぐ外じやない？ 今の季節ならきれいな花がたくさん咲いてるし」
「りんのあとを村の若い男が追いかけていつたと聞くや否や、殺生丸様はおひとりで翔んでゆかれてしまい……儂には、りんのにおいをたどりのできる鼻なんぞないといつのにー。」
「……」
「……」
「あんまりです、殺生丸様ー！」
「……ねえ犬夜叉」
「なんだよ」
「あんたのお兄さんつて、わかりにくやつで案外わかりやすいわよ
ね」
「……放つとけ」

生まれござるロレ（前書き）

弥勒と珊瑚（+）。こんなにちは、赤ちゃん。
弥勒×珊瑚風味。

弾けるように響き渡った産声に、弥勒は思わず息を呑んだ。

「みつ、弥勒、弥勒、産まれたぞ。産まれおったぞ！」

動搖しているような笑つているような七宝の声に、弥勒は「ああ

……」と間抜けな返事で応えた。じみ上げてくるどんな思いも言葉にならない。

妻の珊瑚が陣痛を訴えたのは、まだ空も白みきらぬ明け方のことだつた。

珊瑚の呻く声に飛び起きてみれば、彼女は苦しそうな笑顔で「じめん、法師様。もう産まれるみたい」とのたまつた。急いで産婆でもある楓を呼んできた頃には、すでに破水に至っていた。

古来より、出産は女の戦いであり領分である。たとえ夫であろうと産屋に踏み入ることは許されず、駆けつけてくれた犬夜叉や七宝ともども外で待ち続けるしかなかつた。

気がつくと、空は宵の瑠璃色に染まりかけていた。聞こえてくる妻の悲鳴に産屋へ駆けこみたくなる焦燥を堪えることに必死で、時間の流れなどすっかり忘れていた。

こんなにも長く苦しみ抜いて、珊瑚は新しい命をこの世に送り出してくれたのだ。外でもない、自分の子を。

たまらず片手で口元を覆つた弥勒の肩を、犬夜叉が小さく叩いた。父親となつた友を見る金の双眸は、今ばかりはやわらかく微笑んでいた。

「いのこひとめせ、『おめでとひ』でいいんだよな？」

「……ああ

弥勒はくしゃつと顔を歪めた。

「なつさけねえなあ。親父になつたんだから、もつりょくとしあきつとしろよ」

「しようがないだらひ……子どもが産まれたんだぞ。俺と、珊瑚の、

子が

軽口を返すそばから田の奥が熱くなり、いよいよ弥勒は俯いた。

肩の上までのぼってきた七宝が顔を覗きこんでくる。

「弥勒、わしからも言わせぬ。おめでとう、じゅ！」

心からの祝福に、弥勒は頷くことしかできなかつた。本当に情けない限りだが、口を開けば嗚咽しかこぼれない。

どうしようもなく幸せで、今この瞬間がとてもない奇跡のようだつた。

奈落の呪いによって父を喪つた日から、決して自分に流れる血を絶やしてはならないと思うようになった。

もしも奈落を滅ぼし、風穴の呪いを解くことが叶わなかつたら、たとえ死とすら呼びがたい消滅の運命を子に強いるのだとしても、自分の代で終わることなど許せなかつた。

血脉そのものが呪いに喰われたときこそ、自分たちの負けなのだ。祖父の絶望、父の無念を、どうして忘れられるだろう。

受け継がれる復讐こそが、呪縛だつた。

きっと自分ひとりですべてを背負いこんでいたら、幼い我が子に悲しみと憎悪だけを遺して消えていただらう。仲間たちと珊瑚と出会い、彼らがともに戦つてくれたからこそ、弥勒はこの途方もない幸福を手に入れることができた。

無垢な命に託すのは、もはや哀しい怨讐ではない。光に満ちた、まつさらな未来だ。

「ほら新米親父。いつまでも女々しく泣いてねえで、せつせと女房と赤ん坊の顔見てやれよ」

小突かれるように背を押され、弥勒は顔を上げた。元気な赤子の泣き声が、まだ見ぬ父を呼んでいたようだつた。

男の子だろうか、女の子だろうか。どちらでもかまわない。小さなぬくもりをこの腕に抱いて、珊瑚によくやつたと、ありがとうと伝えるのだ。

「まだ入るんじゃないよ！」

しかし弥勒の感動は、切羽詰まつた楓の声に打ち破られた。

「……は？」

今まさに口を開けようとしていた弥勒は、ぽかんと目を瞬いた。

「駄目です、駄目なんです。まだ終わっていないんですう！」

いつたい何が終わっていないのか。

呆ける弥勒を、痛みに喘ぐ妻の叫びが再び殴つた。

「さつ、珊瑚！」

「だから入つてくるんじゃないと言つとるだろつ！ まだお産は終わっていないんだよ！」

「ええつ！？」

赤子は無事に産まれたはずではないのか。弥勒ばかりでなく、犬夜叉と七宝も混乱の海に突き落とされた。
「ど、どうなつとるんじや！？ まさか、稚児ややこが珊瑚はるいの胎に戻つてしまつたのか？」

「ンなわけあるか！ いつぺん出たモンがどうやつて元に戻るんだよー！」

「ああああ、珊瑚はるいつ、珊瑚はるい ツ！」

男たちはなす術なく、産屋の前で大いにうろたえるしかなかつた。
一度目の産声が彼らの耳に届くのは、月が夜空の高みに昇りきる頃だつた。

＊＊＊

気が遠くなるような痛みの末に産み落としたのは、ふたつの命だつた。

「道理で大きいお腹だと思つたよ」

まさか双子だつたとわねえと、楓は隻眼を細めて苦笑した。

「珊瑚さん。ふたりともかわいい女の子ですよ」

産湯を済ませた我が子をりんが差し出してくる。真っ白な産着に包まれたふたりの赤子は、鏡に映したようにそつくりだつた。床に伏せたまま、珊瑚は両腕で子どもたちをそつと抱いた。小さな赤い手を必死に伸ばしてくる様子を眺めているうち、目元にじわりと熱が滲む。

「よかつた……」

「初産で双子なんて大したものだ。本当によくがんばつたね」「優しい楓の声に喉が詰まる。珊瑚は泣き笑うように微笑んだ。

「ありがとうございます」

「わたしたちはおまえさんの手伝いをしただけだよ。がんばつたのはおまえさんと、この子たちだ」

りんが貰い泣きの涙を拭いながら、大きく頷いた。

「そうですよ。お産の一一番の功労者は、いつだつてお母さんと赤さまです。珊瑚さん、おめでとうござります」

「……ありがとうございます」

産みの苦しみに耐え抜いた心と体は疲れきついていたが、それすらも幸福に感じられた。あたたかな波にまどろみながら、珊瑚は何より訊きたかったことを尋ねた。

「法師様は……？」

「ああ、そうだね。りん、亭主殿を呼んできてくれ

「はあい」

とたとたと軽い足音のあとに、りんが夫を呼ぶ声がした。すると、ぶち破らんばかりの勢いで戸が開け放たれた。

「さあ、珊瑚は！？ 赤ん坊は、無事なのかつ？ 胎の中に逆戻りしてないか！？」

……どうやら、かなり気が動転しているらしい。

りんが笑いながら「珊瑚さんも赤さまたちも元気ですよ」と応え

ると、微妙な沈黙が落ちた。

「……たち？」

「はい、双子の女の子です。珊瑚さんに似て、とっても美人ですよ」再び沈黙。やがて聞こえたのは、なんとも気が抜けようなため息だった。

「ふ……ふたりか。そうか、双子か……」

珊瑚は視線をめぐらせた。弥勒は小屋の入り口にへたりこみ、ぐつたりと項垂れている。

「一度産まれた子が母親の中に戻るなどあつてたまるかい。まつたく、情けない父御だねえ」

心底呆れたような楓の言に、弥勒はのろのろと顔を上げた。その表情は、やはり情けないとしか言い様がなかつた。

「面白ない……」

「さあ、法師さま。早く赤さまの顔を見てあげてください」

りんに促されてこちらへやつてきた夫に、珊瑚は笑つて問うた。「そんなに心配だった？」

「あ、当たり前だろう。無事に産声が聞こえたと思つたら、まだ終わつてないなんて聞かされて……寿命が縮んだ」

いつになく頼りない顔で呟き、弥勒はためらいがちに頬へ触れてきた。珊瑚の腕の中で眠るふたりの我が子を映した双眸が大きく揺れる。

「……あたしたちの子だよ」

弥勒のもう一方の手、かつて風穴が穿たれていた掌が、震えながら赤子の顔を包む。一度、二度と撫で、彼は「ああ」と声を洩らした。

「おまえと俺の、子だ」

頷く言葉は、熱く、歡喜の涙に濡れていた。その口元が笑おうとして失敗している。

いつの間にか、小屋の中には自分たちだけがいた。楓とりんが気を利かせてくれたらしい。

「珊瑚」

頬に掌を添えたまま、弥勒が顔を寄せてきた。珊瑚の首筋に面を伏せ、ありつたけの想いが詰まつた声で告げる。

「ありがとう」

珊瑚は目を閉じた。夫のぬくもりが触れ合つ肌から沁みこんでくる。

「俺たちの子を産んでくれて。本当に、ありがとう」

生きていって、よかつた。

この人を好きになつてよかつたと、珊瑚は心から思つた。かつての自分にとつて、故郷を滅ぼし、たつたひとりの弟を奪つた奈落への憎しみだけが支えだつた。まるで手負いの獣のように差しのべられた優しさを拒み、痛みを叫ぶ傷が癒えることをおそれていた。

そうしなければ、生きていけなかつた。

だが、ひとりではないと教えてくれる友に出会つた。寄りかかつてもいい、泣いてもいいのだと、痛みを分かち合える仲間たちにめぐり会えた。

そして、恋をした。

はじめてだれかに寄り添いたいと、ともに生きたいと思った。叶わないかもしだれぬ願いは、つらく、苦しかつたけれど あきらめなかつたからこそ、自分たちは戦いを乗り越えて今にたどり着いた。守れなかつた人々は一度と戻らず、傷が塞がつても痕は残るだろう。それでも、珊瑚はこれからも生きていぐ。

弥勒とともに。

「……こちらこそ」

瞼を上げると、あたたかい涙が静かにこぼれ落ちた。弥勒のまなざしがこちらを向いて、まぶしそうに目を細める。

「あたしに家族をくれて……幸せをくれて、ありがとう」

弥勒は優しく彼女の涙を拭い、こつんと額を合わせた。

「それも、お互い様だ」

瞳に浮かぶ同じ想いを確かめ合つて、年若い父親と母親は、はにかむような微笑みを交わした。

それは、あるひとつの家族が生まれた日のことだった。

往復書簡（前書き）

草太とかごめ。海の向こうよりも遠いあなたへ。
犬夜叉×かごめ風味。

ねえちゃん、お元気ですか。

ぼくたちはみんな元気です。じいちゃんは最近、「階段ののぼり下りがつらくなつた」とぼやいていますが、あいかわらず変なお守りを神社の人気商品にしようと意気込んではつまづいています。

ママはこの頃、衛星放送の韓流ドラマをチラックするようになりました。今まで見向きもしなかったのに、実はお気に入りの俳優ができたようなです。そのうか、DVDを買つんじやないかとぼくは睨んでいます。

ブヨはあいかわらず、田がなじるじるしています。ねえちゃんがいなくなつてからは、ぼくの部屋に入り浸るよつになりました。ブヨは「元なりにさびしいのかな」と思っています。

ぼくはこの間、中学に入つてはじめての中間テストを受けました。手応えは……正直、あまりよくありません。ママがにっこしながらお説教をはじめると姿が目に浮かぶようで、今から戦々恐々としています。ねえちゃんが必死に机にかじりついていた大変さが、よくやくわかりました。

中学に上がつてから、よく「ねえちゃんを紹介してよ」と言われます。もう嫁にいつたんだと説明すると、「ねえちゃんはヤンキーなのか?」と訊かれます。犬のにいちゃんがうちに來ていた頃に流行つた、「ねえちゃんのカレシは筋金入りのヤンキーだ」という噂が今頃になつて信憑性を増してしまつたようなんです。そのうか、ねえちゃんはレディースで総長を張つていたんだとか言われそうで、どうしようか悩んでいます。

ねえちゃんは、戦国時代でどんな暮らしをしているんですか? 犬のにいちゃんと喧嘩していませんか? センカく一緒にいられるよつになつたんだから、仲良くなきゃ駄目だよ。ねえちゃん。

本当に、元気だよね？

草太。

ママ。おじいちゃん。それからブヨ。

お元気ですか？

わたしは元気です。怪我も病気も、今のところ何ひとつしていません。

先日、楓おばあちゃんの手伝いとして、はじめてお産に立ち会いました。この時代のお産は、本当に命懸けです。わたしが立ち会わせてもらったお母さんは、もう何人もお子さんを産んだベテランの経験者だったんだけど、それでも戦場のようでした。わたしは何をしていいのかぜんぜんわからなくて、楓おばあちゃんやりんちゃんの言うとおりにすることで精いっぱいでした。無事に赤ちゃんの泣き声が聞こえたときには、情けなく泣いてしまいました。

楓おばあちゃんたちは、これから少しずつ勉強していくばいと励ましてくれたけれど、ちょっと自信をなくしてしまったのが本音です。薬草を煎じたり、お祓いをしたりするよりもずっと難しくて、本当にこつちでやつていけるのか不安になってしましました。

犬夜叉には、「さんざん今まで妖怪と戦つてきたくせに何言つてんだ」と鼻で笑われました。自分も珊瑚ちゃんの初産のときには弥勒様と一緒にになってうろたえていたくせに、失礼なやつです。正直、妖怪と戦うよりもお産のほうがよっぽどおそろしい気がします。

でも、本当はわかっているんです。

だれだつて最初は怖くて、少しずつ積み重ねていくことで、それ

を克服するんだといつこと。はじめはまともに「」を引くこともできなかつたわたしが、今では空を飛んで逃げようとする妖怪を射落とせられるように。少しずつ少しずつ、確かなものを「」の手で作つていくんだと。

きつと犬夜叉は、そう言いたかつたんだと思います。実は、あのあと喧嘩になつてしまつて、まだ仲直りしていないんです。わたし謝るのはなんだか癪に障るけれど、少しずつ素直になつていこうと思います。だつて、一緒にいられるんですから。

わたしは、幸せです。

みんなに会えない」とはせびしくて、みんなのことを思ひ出して泣きそうになることもあるけれど、毎日笑つて元気に過ごしています。だから安心してください。

願わくは、みんなもそうありますよ！」。

この手紙が未来に届くかどうかわからないけれど、届くと信じて、これからも井戸の向こうに送り続けたいと思います。
それでは、また。

ねえちゃんからの返事が来ないかと、ときどき井戸を覗きこみます。

ねえちゃんが嫁にいった日、井戸の向こうには青い空が見えました。もう一度あの空が見えないか、そしてひょっこりねえちゃんが顔を覗かせたりしないかと思わずにはいられません。

いつか、ねえちゃんが犬のにいちゃんと一緒に里帰りする日まで、手紙を出し続けたいと思います。そのときには、かわいい甥っ子か

姪っ子に会えることを期待しています。

それでは、犬のにいちゃんによろしくお伝えください。

追伸。

どうか、ふたりが元気でいますよ!!。

FALLING YOU (前書き)

殺生丸とりん。プロポーズ攻防戦。
『CALLING YOU』その後。糖度高め。

己を失墜させるものがこの世にあるなどと、殺生丸は思いもしなかつた。

孤高という言葉を筆で描くとしたら、まさしく彼がそうであった。捕らわれる」とも屈することも知らず、何人の手も届かぬ遙かな高みを行く男。だれもが、そして殺生丸自身が、その在り方を疑いもしなかつた。

そのはず、だつた。

「……りん」

困惑をわずかな間に滲ませ、殺生丸は目の前の娘の名を呼んだ。常であれば、それこそ花のような笑顔を咲かせ、「はい、殺生丸さま」と嬉しそうに声を弾ませて応えるといふのに。敢えなく突き返されたのは、実に居心地の悪い沈黙だった。

殺生丸と膝を向かい合わせたりんは、しかし視線を彼に向けることなく横へ逸らしていた。この頃、頬とみに娘らしさが増してきた横顔はむつりと押し黙つている。皺深く寄せられた眉根が、彼女の不機嫌ぶりを物語つているようだった。

片膝を立て、脇息に頬杖をついた殺生丸は、繼ぐべき言葉を見出だせずにいた。鉄面皮も青ざめる能面ぶりを誇る彼だが、今ばかりは薄い金の双眸を頼りなく揺らしていた。それでも、息子の心根を憎たらしいほど見透かしている実母ぐらにしか気づけぬ程度だったが。

結局、再び殺生丸が口にしたのは、情けなくも直球の問い合わせだつた。

「いったい何が不満なのだ」

異母弟の縁（と、考えるとなんとも気に入らぬことだが）で知り合つた老巫女に預けていたりんが殺生丸の許へ戻つてきて、もうすぐひと月が経つ。数年越しのりんの帰還を素直に喜んだのは阿吽で、従者の邪見は昔のようにぶちぶちと文句を垂らしていた。しかし、

なんだかんだ言いながらもかいがいしくりんの世話を焼く様子は、まるで嫁へ出した娘の里帰りに浮かれる父親のようだつた。

りんも心から幸せそうな表情を見せていたが、いつからか殺生丸に対する態度が強張りはじめた。二日前にはすっかり硬化し、もはや棘が生えかける始末である。

邪見や阿吽に対するは、まったく変わりないのだ。殺生丸にだけ笑みを見せず、口を閉ざし、振り向こうともしない。

ふたりの在り方は、不動の殺生丸に対してもりんのほうから行動を起こす、というのが基本だ。だから今回も殺生丸は腰を上げず、自然にりんの機嫌が直ることを待つことにしたのだが、どうやら、時が解決することも難しいようだつた。

小心者の邪見は何も言わないが、かなりやきもきしていることは鬱陶しいほど訴えかけてくる視線から察せられた。とうとう根負けしたがゆえに、こうしてりんを呼びつけたのだ。

しかし、よくよく考えてみると、りんが自分にそっぽを向くなどという事態はこれがはじめてだつた。どうすれば彼女の瞳を取り戻せるのかわからず、殺生丸は途方に暮れるしかなかつた。

「不満があるならば、申してみよ」

りんが何かに怒つていることはわかる。だが、その『何か』がわからぬ。

「りん」

語氣を強めてもう一度呼びかけると、りんは微かに睫毛を震わせた。きゅつと噛みしめられた唇が殺生丸に向き直りたい衝動を堪えている証のような気がするのは、都合のいい自惚れだらうか。

出会つた頃は、己の腰にも満たぬ童女だつた。親兄弟と声を失い、村人に冷遇されても、殺生丸に見せる笑みはいつでも澄んでいた。言葉を取り戻してからは雀の『ごとくさえずり、抱き上げれば鞠のよう』に笑い声を弾ませた。小さな体からは、いつも日向のにおいがした。

だが、青い薔薇がいつかやわらかく綻ぶように、人の娘にも花開く

時がやつてくる。殺生丸の前にいるりんは、もはやナビもではなかつた。

背丈が伸び、体つきは幼子のものとは異なるまりみを帯びはじめていた。癖のある髪に櫛を通すことを覚え、きちんと束ねられた毛先は背の半ばを過ぎている。何より いつからこんな物憂げな顔をするようになったのだろうか。

おそれしやにも似た思いを噛みしめ、殺生丸は脇息から身を起した。

手を伸ばしてりんの頬に触れる。見開かれる黒い瞳に、彼は言った。

「私を見ろ、りん」

それは懇願だった。

殺生丸に関しておそれしく聴いりんは、気づいたのだろう。ひどくびつくりした顔で、おそれおそれ彼を振り返った。

殺生丸はすかさずりんの両頬を包みこみ、そのままなぞしを捕らえた。

「私は、不満があるならば申せと囁いた。黙れなどとは囁いていい」

ぬばたまの双眸を覗きこむと、りんの表情がくしゃりと歪んだ。それがあまりにも儚くて、殺生丸は息を呑む。

「だつて……」

昔よりも低く落ち着いて、だが鈴の音のように軽やかなはずの声は、震えていた。

「殺生丸さま、なんにもしないんだもん」

ただ、その言葉遣いだけはどこか舌つ足らずで、ひどく甘い。

「あたし……あたし、殺生丸のお嫁さんになれるんだつて思つてました。一緒に来いって言つてくれたの、そういう意味だつてでも、とりんは喘ぐように続けた。

「殺生丸さま、昔とおんなじだった。なんにも変わってなかつた。

じゃあ、どうしてあたしに来いって言つたんですか？ 人間か妖怪

かを選べって、そういう意味じゃなかつたんですね?」

りんの目が潤み、今にも溢れそうに涙を湛える。小さな拳が弱々しく殺生丸の胸を叩いた。

「あたしは選んだんです。じゃあ、殺生丸さまにひとつ、あたしはなんなんですか?」

殺生丸は、答えなかつた。

言葉では。

「……つー?」

ぐつと距離を詰め、彼は驚きを呑ぶよつた呼吸」とりんの唇を塞いだ。

はじめて触れる少女の口唇はとろけるよつて熱く、やわらかかった。甘露のような味わいを夢中になつて貪る。

細い腰を抱き寄せると、荒波に投げ出された者のよつにすがりついてくる。息を吹きこむよつた接吻をくり返すうちに、腕の中の体から力が抜けていった。

口づけから解放した途端、りんはぐつたりと崩れ落ちた。紅潮した耳元に、殺生丸は唇を寄せた。

「……ともに来いと言つたのは、こいつつもりだが?」

隠しよつもない熱のこもつた舌をやさしく、りんの顔がいつそう赤らんだ。あまりの不意打ちに言葉も出ないらしく、猫に似た目を忙しく瞬かせている。

殺生丸は姿勢を直すと、組んだ膝の上にりんを乗せた。女らしさを増しつつあるとはいえ、未だ華奢な肢体を袖の内に閉じこめる。

「おまえはもう子どもではない」

生来の気質を表すよつに元気よくあちこち跳ねた癖つ毛を指で梳きながら、殺生丸はいつになくゆるやかな口調で語りかけた。

「だが、まだ女になりきつていない。私はおまえがそうであるつに、おまえを妻にする気はない」

「……どうしてですか?」

堅い胸に頬を寄せたりんは、悲しげに尋ねた。殺生丸は彼女を抱く腕に力をこめた。

「物事には相応の時期がある。花を手折るには、薔薇が咲ききるまで待たねばならぬ。おまえは、よつやく咲き綻んだ薔薇のようなものだ」

だから、まだそのときではない。

本音をいえば、殺生丸とて憂鬱なため息をつきたくて仕方なかつた。よつやく望んだ形でりんを迎えたといふのに、眞の意味で手にできるのは当分先のことである。まさに生殺しだ。

だが事を急いでしまえば、傷つくるのはりんなのだ。いとおしむべき存在を壊してしまつては本末転倒である。

待ち焦がれていたのは何も自分だけではないと知つて、殺生丸は安堵する一方で開き直つてもいた。待たねばならないのなら、待つことを楽しめばいい。

甘く色づき、咲き初める薔薇には、それにふさわしい愛で方があるう。

「おまえが花を咲かすまで、私は待つ。おまえはここで、私の腕の中で、私のために咲けばいい」

ふつくらとした下唇を親指の腹でなぞると、りんの表情がまた崩れた。しかしそこに曇りはなく、家にたどり着いた迷子が見せるような泣き顔だつた。

「あたしを、お嫁さんにしてくれるんですか？」

「なぜ私がおまえに虚言を吐く必要がある」

りんは涙をこぼしながら笑つた。よつやく目にすることの叶つた笑みは透きとおるようになめしく、陽光のようにあたたかく殺生丸の胸に射しこんだ。

少女の頬を濡らす零を唇で吸い取りながら、殺生丸は言った。

「私とともに在れ、りん」

「はい、殺生丸さま……」

りんは力いっぱい頷くと、殺生丸の首に腕を回した。太陽の香りを纏つた黒髪に頬を埋め、殺生丸は目を伏せた。

かつて、彼は孤高と謳われた。だがどうだ、天の高みを行く強大な妖怪を、か弱いはずの人の娘があつさりと地に叩き落とした。ぬくもりを教え、慈しみを教え、果てにはだれかとともに生を歩むことすら教えようとしている。

なんとおそろしく、愛しきことか。

かつて嘲笑つた父の一の舞なるのだと思うと、素直になれぬ部分があるのも確かだつた。腑抜けと蔑んだ異母弟の同類になつてもよいのか、とも。だが、ひとたびりんの笑顔を目にすれば、そんなひねくれた矜持はいともたやすく片づけられてしまうのだ。きっと生涯、未来の妻に敵うことはないのだりうと確信しながら、殺生丸は心地よい敗北感にゆっくりと微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5789k/>

時浮橋 ときのうきはし

2011年4月3日14時56分発行